



古今
談

解
野
記

二の巻

~ 13
3138
2



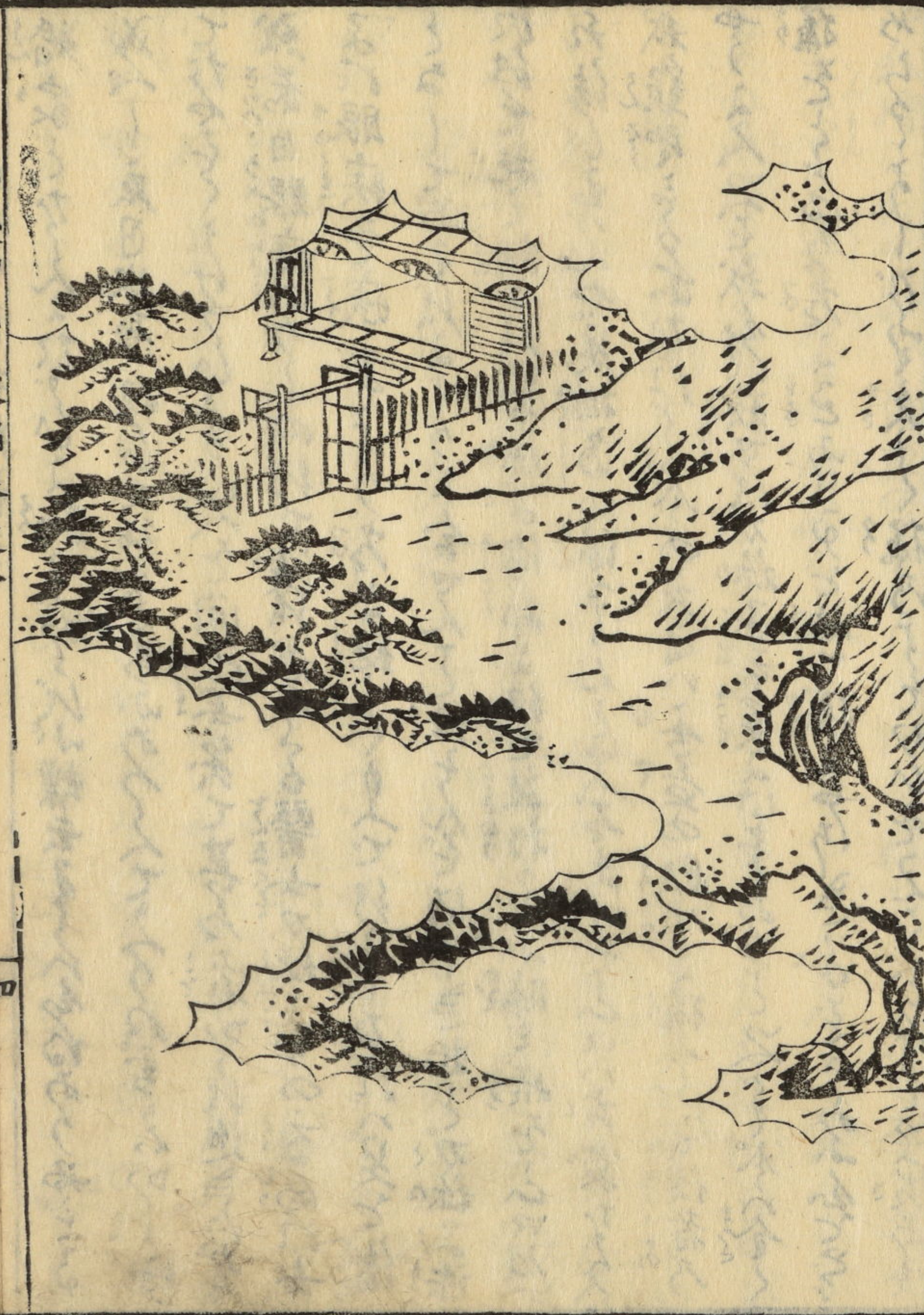
古今奇談野話第二卷

三 紀の園守が靈ら一旦白鳥に化せる話

佐古いづもの世も。紀泉のさうい雄れとの園と。山に庄司次郎有者よと
 いふの家よ。ほくして是と守る。多の家僕日次と接と園とほくし。庄司
 次郎生かぬを食く。平日儀儀ぬそ外の樂とを要めぬ。又紀よりの家よ
 養せらる一張の寢るあり。鹿鳥の敷文ごらよだよあまは射あてどといふや
 る。中る射の皆羽と飲で一茶よ飲る。近村四所れ禽類けらよ獲らる。
 こと衆世衆事とあす。家よ多れといふたたらととたらつらとも。ほくせり。
 庄司次郎有者にた。一族廣くは多るなる。今ハ者同くしてなる。又和の園人
 橋の村旅くし人の末子雪名親の身とくしつて家をさす。妻と具とて
 紀の園よある。山にたりて扶助とをよ。庄司次郎有者に。男とを抱く。あま
 吐く。歎とする。雪名生かぬとて。七温床にのるんぞ。庄司ほくびあひて

昭和九年
 九月十二日
 購求

古今奇談野話第二卷



英州傳後編卷之二

四



英州傳後編卷之二

五

婚家となんたがしいと取らぬが、小蝶云々いふゆゑありぬ。
 ぬべし。衣目次第怪じて訴へんとす。夫ありてうけぬ。言ふゆゑ
 てたむとくうけぬ。いふを問ふ妻、笑て其の遠くは遠き人者
 我前日眼痛ありし時、終て治癒せらるる醫女、刀祿子。のる白れ士
 子、眼疾を療ふとより。子、親しくりて終りかれば、是と諸
 となりて。あま然よりりて、命せん。仕そんども、はつきり。刀祿子、許
 けりて、托と調れば、刀祿子、珍部よりて、能おろす。小蝶、婚をいひ、
 我、結ぶ。いんや。是相違の縁をうんとす。おま、笑ていひ、古家なり
 我、懇切とる。あかた。いども。今の衣目、は、是の殺生、痛く。と、後者、乃
 やうよ、人、を、我、を、欲、せ、ん。刀、祿、子、云、実、は、事、あり、と、い、ふ。今、い、食、く
 痛、を、と、い、は、り。老、よ、こ、こ、い、と、悔、て、優、や、り、き、い、と、い、ふ。今、い、食、く
 め、ら、る、よ、う、い、が、い、え、く、痛、ろ、う、と、い、ひ、を、い、ふ。と、い、ふ。と、い、ふ。と、い、ふ。

我、婚、よ、り、て、取、ら、れ、た、の、と、な、り、と、い、ひ、を、解、て、い、ひ、衣、目、を、穿、と、り
 て、音、言、を、通、し、程、な、く、婚、姻、を、調、へ、る。是、よ、り、て、衣、目、一、入、あ、り、く、る
 事、の、沙、汰、し、る、が、い、ん。雪、ん、夫、奴、衣、食、欠、と、な、り。衣、目、奴、痛、と、い、ふ。
 て、小、蝶、の、衣、服、の、料、又、賤、色、と、も、け、ぬ。親、衣、を、製、さ、る、事、と、い、ふ。守、り、の、
 絹、布、皆、刀、祿、子、よ、り、な、り。他、が、着、高、衣、と、換、お、し、て、服、用、を、足、る、人、者
 の、今、は、異、な、り、と、い、ふ。人、も、い、ふ。有、り。愛、又、如、泉、園、に、着、而、族、登、受、人
 と、い、ふ。愛、民、あり。親、ろ、う、め、代、より、堅、く、殺、生、成、り、ま、り。笑、て、夏、人、よ
 り、て、も、只、け、る、我、助、を、い、て、い、ふ。他人、の、殺、生、を、い、て、説、さ、り、て、体、い
 ひ、女、房、の、後、の、母、の、前、又、嫁、し、る、所、を、出、生、せ、り。女、と、具、し、て、此
 家、又、嫁、し、ま、り。夏、人、よ、り、配、ら、る、と、い、ふ。強、又、殺、と、結、ひ、ら、る、よ、り、の、ま、い、奴
 別、て、女、乃、い、か、り、と、い、ふ。ま、と、た、を、け、て、家、を、治、め、水、と、魚、の、れ、い、食、
 位、ろ、う、い、ぬ、が、い、ぬ、と、い、ふ。十、と、い、つ、つ、七、と、い、ぬ、の、状、な、ら、び、癢、ら

弓をさへば。家人の内は盗ととりし者あるやと捜す。おしること
 急なり。其方をさるる。盗賊とも人ど。怪しきか。説くらん。さす
 とらども。今同前。いん。さる。し。も。あ。ま。だ。世の中。怪し。お。し。推。き。これ。わ
 らず。其男。い。と。免。と。さ。本國。よ。人。を。遣。て。其。身。許。を。も。せ。ら。し。と
 せ。白。い。皆。と。毎。日。掃。て。散。ら。る。其。叔。父。日。々。及。よ。小。嫌。身。り。て。こ
 ち。我。母。と。ら。し。同。ト。推。し。て。智。英。の。長。者。が。お。お。春。富。為。命。を
 免。あ。る。叔。父。な。ら。ん。其。報。り。と。彼。が。家。又。掃。掃。成。と。り。経。理。
 乃。山。の。園。守。が。殺。生。は。耽。る。成。制。止。せん。との。念。あり。て。達。せ。ん。我。を。念。を
 後。て。先。出。り。寶。弓。を。お。隠。し。我。身。の。か。ま。り。と。く。て。ま。く。及。よ。
 逃げ。大。か。なる。雪。名。を。さ。さ。い。出。し。け。あ。ま。り。你。が。魂。を。迷。り。死
 て。湖。く。殺。生。成。と。免。望。ぬ。ん。ぬ。と。あ。ま。事。か。ま。る。べ。又。白。狐。を。捕。せ。ら。り。
 との。い。と。さ。よ。あ。し。か。ら。う。足。人。の。言。傳。ふ。て。推。察。何。の。寶。貝。と。か。な。す。
 き。膝。下。の。皮。を。縫。あ。り。ま。せ。て。白。狐。を。う。る。れ。も。神。又。殺。く。と。て。服。は
 に。堪。む。肌。不。平。な。り。年。経。て。白。狐。と。な。り。し。毛。落。皮。枯。て。赤。く。な
 る。ん。負。觀。る。し。此。よ。公。よ。若。く。推。白。鹿。の。用。か。れ。る。を。語。し。あ。
 去。り。ても。靈。なる。り。彼。良。弓。通。又。他家。よ。こ。ま。さ。す。自。ら。死。こ。い。は
 の。家。又。帰。ふ。神。ら。う。る。掛。画。虎。威。真。よ。逼。り。て。我。が。多。年。の。血。を
 を。破。る。是。皆。抽。乃。定。殺。し。て。我。が。力。又。及。む。さ。る。あ。か。り。と。其。叔。父
 一。夏。の。お。ご。り。庄。司。次。弟。雪。名。及。よ。人。も。た。ら。ぬ。一。詞。か。れ。ば。と。ま。一
 狐。の。お。お。り。て。三人。推。し。の。公。機。を。考。し。ぬ。其。叔。父。の。庄。司。次。弟
 此。の。ま。が。殺。生。より。幸。ね。ら。り。ぬ。れ。と。し。げ。ら。と。長。く。庫。裏。に。ね。ぬ。
 其。位。よ。あ。し。し。て。無。益。の。推。を。あ。る。は。公。と。潜。る。な。り。と。さ。げ。う。
 人。や。と。あ。り。て。再。び。殺。生。に。お。び。ぬ。雪。名。及。よ。人。も。迷。惑。を。ね。ら。る。女。房
 を。と。幕。ふ。公。の。や。ま。ざ。り。乃。と。い。べ。同。し。あ。い。よ。庄。司。有。與。の。う。ん。味。

ト乃侍

川を縁した川乃乃弓のつものまゝあつて若く生れど人なり
雪ももくねひつてきて

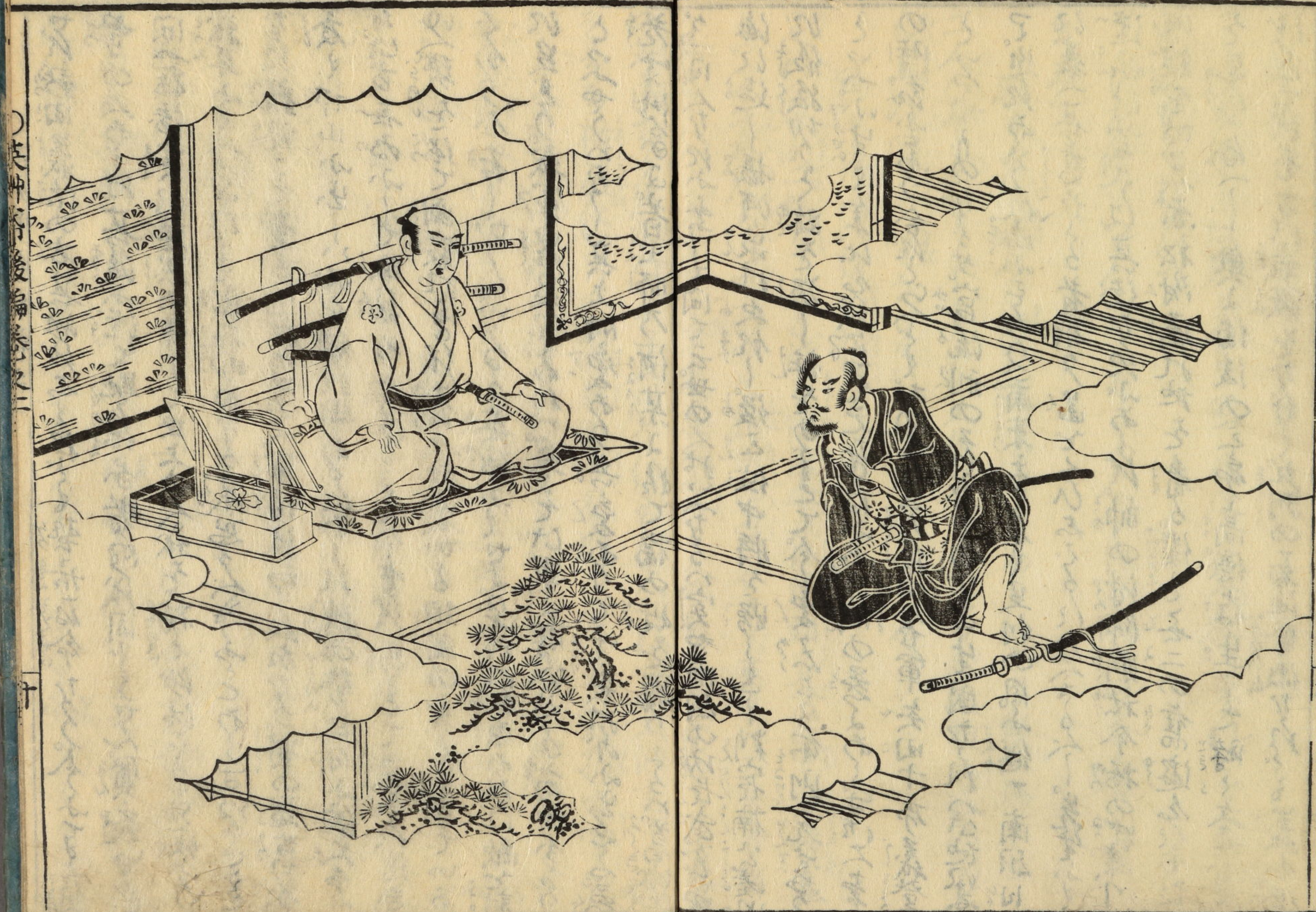
ながれたつるやうさくさくさく紀乃川上の白鳥の雲
友人

朝のあひ光を照して紀の川のたもとにいまるれ我海を
二人の奉えとてうしるゝして大わづらとてわづらぬ彼雄の山乃園と
白鳥乃園とも呼ぶるへけ謂ふよるととく

④ 中津川入道山伏塚を築志しむる詠

足利の世漸一統なりんとし貞治應安に比勢列多々の口は橋橋を築
とてふ人文武雄及金の世あまて遠近に遊人多くし。其中に三年をあり
入道入道人字多経房といふ者。其人を推く人の教を成てて多言るる

が二日人がたふ素じて回て云。世の人共いふるは実也。南羽の功長武も四
海に遠し。播河泉れ更なり。後之位中將を賜ふも一判長楠公湊川
に後後切りと跡を強し住をのぞきて。今も愛ふもも前則先生も
とてふ。小生もまはを成ててなほふ常倫の愛ふあつては。大幸
の時節小幸り合はるといふもがのまゝにわねの宿軍。矢田十郎義登
とてふ。あつたが。宮流刑のそ身とのまは生國たれば。地味
了。進死あつた。ゆふをあり。爾来より本も足利の風も偃へ。南羽は
に義。其着る者。朝夕とていふも。先生も
遊人にいふは。其後たれふあつた。帥の侍師。則社。今楠の中津川
に録をかま。赤松附属れ地を看る。僕とて二の着遊人。あつた
を思はれ。奥も備後の之。高徳存生。とて。時とて。文
は。まて。只もあつた。衰敗をたげく。九列の菊池。勢微たれ。る。義も



東海道御成道

東海道御成道

世に新田義治の方其初成て終も誓后命なり。今も其
 誓の人あはば其後ふして馳集ふ者何成同どうせん。賢
 同の極端実に迷惑の伴とて世上の人我を捕と沙汰とるの疾
 我耳をへりてたも。出の白から果恐るんきふとあす。然
 かに新説そ。貴方を始世の人軍情成知ねあたり。蜀の諸葛
 度も祁山小出い必と勝れ術あるのわ。魏の勢日日本浩大
 だ。けち無ふして取録めたるもの。そを以吾もして危き
 以勢を以て國家れを以て計未の相國の身となりてい
 るのり心若しひん。いりり英雄やせよ。是後れを
 以是より。我軍畧是れにわれば。是とい軍も勝べきよ。尚十分
 とふやうなり。其上財愛あり兵を愛ありて千急れおふ
 老は此家も若土師乃何果は始て捕の姓を賜り。ら首
 の外戚なり。故ありて其姓を継む。八代好たの大細言
 を分ち樟庵にい。うてふ身微力なれ。も宿軍れ大指ふ
 ざうくき大地の死を得て大敵をふせ。軍機を我わして
 愛に鬼神の如く。是皆其時小はて疾疾のやうの智
 計を練出。一族士卒れ精忠より拒ぎおせ。智に及ばさ
 をせめて命ふはくせ。一人は敵とるも日本國を以て死
 一命。おすれをり。うけけ。君に捧げ。首標たゆはす。力
 主師は方。恢復の時成。て。是利成謀及の秘。よ。び。西海
 走らし。免。敵。ふ。り。還。都。か。り。な。る。ま。で。盛。名。を。ま。さ。さ。り。こ。し。つ
 一時運のそ。じ。よ。る。あ。か。り。い。ま。政。を。む。け。賞。討。均。な。る。は。
 新田の英雄なり。と。も。家。勢。秘。より。激。ふ。て。る。民。に。對。せ。ん。
 既に家運傾く。の。小。宗。と。り。よ。こ。い。り。し。よ。大。多。勅。無。と。り。れ。利

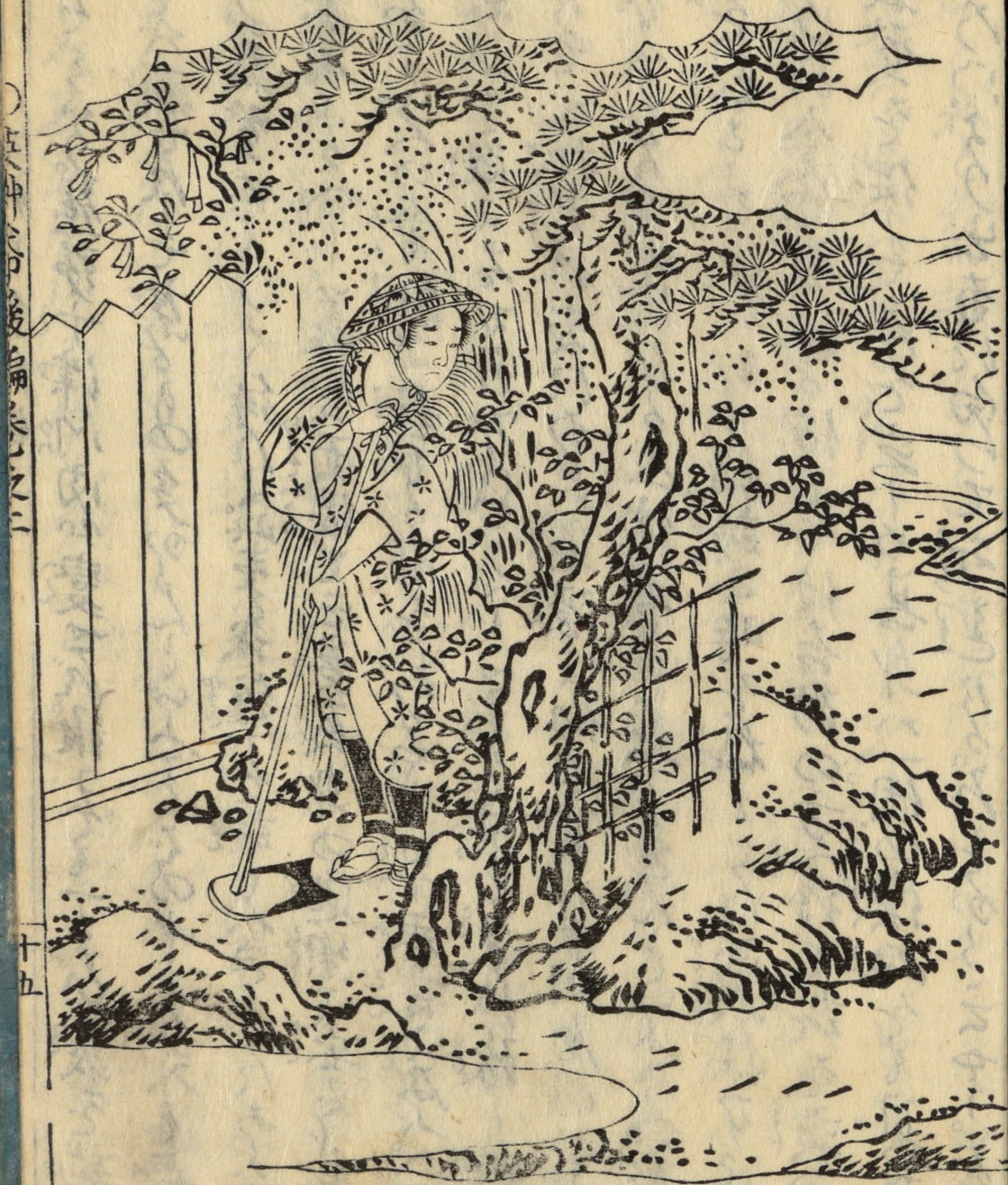
天命の取らる。明眼よりんれば勝べきの敵にあはれざる軍
 利に極りたるものありしにばいづるに極氣をばしし時
 をえのどろりぬり死にたり。已に嫡子に終はる多病を病に死
 せんよりいざ事な流りんと。二十六才にして叙成りて下小我記し
 たる強念なり。今もそえれば死我の國をくろぐをねて
 士らあいの初より其主人をきくべきこと一せぬるなり。黄石
 が直と腹を隨て張良よ取らるる。其踏あよんて用ひよる乃
 教を強しとらほむなり。棟原初に天命の取らるるを以ておすれ
 なり。終に命の革をえて死にたり。君よ報ど。公の靈あふ。終者
 の悪を多ぶべし。但し盤は楠公とて呼びて。古代樟乃字。俗に樟
 と者。或は楠の字。小混とらるる。すまき。扱ま。或は楠身は
 扱わりて時をを家あめありべし。是の人情なり。は悪じき
 ぞ。或はまじけぬ。或はてらるる。有羽の根。基とせらる。大和紀の
 一説して。基本巢穴なり。今略起乃。佐の事を成べき。あらず。扱
 下も。年比。諸まら。ちる。な。は。は。い。ま。ら。る。乃。成。り。成。る。乃。た。り
 て。ま。ら。せん。と。枕。と。と。と。さ。角。か。る。本。を。二。つ。れ。出。り。是。を。そ。の。け。な。り
 子。身。に。示。し。隠。忍。なり。と。掛。る。長。刀。を。下。り。て。宇。田。以。り。又。授
 け。る。中。に。誠。を。降。し。て。石。突。を。以。て。直。下。小。突。通。し。試。さ。る。べ
 し。録。を。下。り。たり。中。に。念。と。ら。あ。り。て。力。に。ま。り。也。突。下。り。て。い
 ず。本。貫。ぬ。て。徹。ま。る。又。一。個。を。お。て。突。下。り。て。い。げ。な。の。録。の。た。り。て
 角。本。依。然。ふ。り。次。り。回。り。て。い。げ。た。め。め。が。ま。ま。ら。る。な。を。書。か。ま。す。其。書。き
 通。り。と。ら。の。内。意。を。い。て。相。れ。ぬ。志。力。強。き。所。の。な。る。べし。後の。業。の
 ざ。ら。の。中。外。に。く。他。本。なり。孫。武。子。が。突。と。ら。る。もの。依。り。と。い。ふ。もの
 是。なり。お。べ。ぬ。其。兵。を。扱。す。是。れ。で。陳。は。降。り。て。一。時。れ。ま。す。とい。ふ

かり。今此世のゆきい實者となり。おびきの時よわらば。或は此下を
かり。こ堅く之通ふ。交なる方費り。が如く。愛封の成。徳を
て事。成然とて。人の情なき。秘勇氣あり。とひ。刈を失ひ
ては。勢折け。始終を保て。し。去書。小娘の處女。の如く。後の脱鬼
の如し。云。脱鬼。の妻。女の既。不。破。身。した。り。成。口。悪。よ。言。ふ。其
比。及。様。詭。なる。を。強。子。取。て。壁。を。せ。り。と。新。田。殿。難。詭。は。流。る。ま
し。生。強。勢。の。勢。も。放。し。ゆ。り。末。し。の。魯。儒。の。流。を。通。さ。ぬ。と。同。じ
かり。足。下。の。如。く。お。ひ。ら。り。よ。る。中。の。の。勢。を。用。ひ。と。り。て。必。用
の時。は。と。き。勢。な。る。もの。なり。げ。よ。う。ゆ。う。の。り。お。ひ。と。ゆ。り。若。老。が
諫。は。流。い。ぬ。と。お。び。せ。り。て。蒙。を。穿。の。詞。は。次。く。赤。面。と。て。公。服
せ。ば。彼。が。け。げ。は。さ。る。は。是。能。ま。る。し。我。密。事。を。お。り。て。は。ま。す
に。ぬ。り。の。し。と。彼。長。刀。の。鞘。を。と。り。し。な。だ。つ。ん。と。す。り。時。た。来

早く後の一間ふ入りて戸を引立てり。一重の障へおはは突をさし
と突長刀の筈より屈成とまば。松刀なり。ゆる前へ門生。救
人へ入りぬ。彼を。何を。な。く。親。を。正。し。く。し。ふ。よ。志。し。劍。を。我。し。は
授。く。海。ど。き。こ。な。り。し。と。立。出。る。ん。と。と。る。所。た。を。湯。出。来。て。再。び。つ。ふ
は。お。び。ゆ。と。よ。法。平。此。世。に。ま。り。用。ま。さ。ぬ。大。人。の。徳。を。害。し。小。人。の。お。び
ぬ。かり。用。ど。し。て。安。き。所。の。松。刀。に。論。は。執。止。る。よ。志。さ。ぬ。は。べ。し。是。を
若。老。足。下。と。送。る。の。辞。今。より。永。く。絶。と。べ。し。と。い。ふ。次。弟。甚。恥。入
り。面。を。低。て。氣。れ。逃。る。が。如。く。其。姿。を。去。り。ぬ。た。を。志。が。勅。作。を。取
る。者。の。人。柄。な。り。此。世。に。人。口。説。な。り。し。と。我。を。迷。ひ。て。ぬ。く。お。家。と。是
情。人。眼。中。は。西。施。と。お。と。と。し。つ。か。り。ぬ。べ。し。宇。田。次。弟。を。ぞ。い。に
外。さ。し。う。へ。早。く。お。ひ。ま。ん。と。ま。よ。り。其。身。山。伏。の。ゆ。め。お。お。ち。て。後
邊。の。位。者。防。へ。古。に。知。音。か。れ。ば。と。彼。は。初。て。其。志。秘。秘。を。さ。さ。り

安。河をぞ別社入る一面でんと中津川に立たるるふ。壘高く
げ高門大補殿又設け。處に水成盛する舟を並置るは乃
釣教多挿て火災は倭へ門内の白砂入るるに奥ふく。對面は
も迂治より入る。看門の者より向ひ。某の園徒とて備驗道也
先年密教ふ系せし時。所主人より朝夕伏侍せし來奉ふおあ
し。上京の路次懐旧控びて推系はる。け類お次て玉りるべしと
看門の者にてやうて入て連なる後。入道推なるやと。睡は後入て
立出えやうとる。多隔てぬまども足受ある矢田義登なり。
法どや美なるりしと。河を親くし。茶飲せし。先酒合を陰。
御事ゆりつぎ。住右衛門宿とれば。みと系んと其日何
事なく。寝してはりぬ。日隔て再び。けおと疏をかく
相待して酒合席を同く吃し。昔よかりぬるをてて。茶

勝込とりあてり。南朝乃股肱。是又宮の職近臣をく。海
に成りたる人なり。時うり代り感傷たり。むと入るも嘆
息して。宮の所謀及變への敷慮より出て。却て御家字にゆづ
せ。お例のまのうらう人と君命なりしと。是志うながる。造
化の自然のうらふなり。義登云。む。日夕ふ。鬱憤をかさん
し。とかのまの今ふ忘ま。と。貴君ははめと。我も人信。先
もざる。前なり。も。隠居して世より。あらざる。身は月。又其。情
うすく。愛ふ。も。固公を。て。玉の。り。お。し。死。ふ。ひ。く。義登云
僕。は。片。時。も。回。後。の。念。や。ほ。だ。あ。ま。れ。昔。日。の。よ。う。と。忘。ま。は。加。祖
あ。ら。ば。日。々。と。ず。す。と。成。孝。ん。貴。君。は。は。足。認。ま。り。ん。今。勢。州。に。移
流。た。去。流。と。愛。ま。と。り。の。ふ。く。捕。判。官。と。し。て。り。彼。の。二。男。一。止。勝
衰。ふ。と。け。ふ。劍。破。を。守。る。奥。路。は。四。國。は。義。宗



五十年六月廿一日

十五



英州府後編卷之二

ひとそとより。能勢千津川内の変せぬ。誰をも一たび義を詢ひ給
 たり。期せんとて来るもの多かりし。いよその中より入道面々の
 あり。義登を去りて待たず。此来我館を請ひてきてし。いよその
 ごとく。義登を去りて。義登面温て云。貴殿身の逸樂は安んじて。舊
 捨ふ。人の會歎は異なる所を知らず。やと早悪言よ及ぶ。入道
 小悲び。既よ右刀を成さん。とて。自らも。成隊し。胸をさ
 たりて云。拙者は。安んじて。返隱し。似て。實は。是れ。成隊し。胸を
 をたす。なり。是。極なる。山伏。ありて。我よ。きん。といふ。人。家。人。を
 疑を起さ。たり。に。か。論。議。し。時。を。極。して。は。西。人。情。な。り。は。似
 あり。只。今。你。を。送。る。体。を。任。右。防。の。方。へ。行。て。請。を。交。へ。ん。と。
 義登を促して。を。立。し。り。其。身。の。一。個。の。僕。奴。を。も。具。せ。ぬ。
 賜。乃。い。より。出。有。い。向。つ。て。お。ま。さ。り。る。も。あ。ら。う。と。云。せ。り。義登

你と我と。舊識なり。と。い。ども。志。れ。然。隔。と。り。て。君。子。匹。夫。の
 遠。わ。り。匹。夫。の。君。子。れ。ん。成。知。ら。む。と。い。ども。君。子。の。匹。夫。を。と。り。て
 易し。義登を。始。り。て。我。い。つ。ら。り。あ。ら。う。是。匹。夫。なる。入。道。云。天下の
 善。を。か。せ。ば。天下。を。利。也。是。君。子。なり。一。分。の。善。成。る。と。ば。天下
 に。害。あり。是。匹。夫。なり。近。年。天。意。諸。乱。に。俸。て。活。世。よ。入。り。善。を
 よ。み。り。り。ら。り。い。を。た。り。四。方。よ。兵。を。勅。と。め。た。り。你。一。人
 存。念。と。立。て。自。ら。懐。を。懐。く。せ。ん。と。歎。して。乱。を。唱。へ。る。遂。に。其。の
 わ。ら。ね。ども。火。起。ま。ば。風。か。つ。て。激。し。の。勢。と。ほ。ば。下。を。震。動。し
 人民業に。就。て。成。ぬ。と。天。兵。一。たび。降。ん。で。行。甲。も。あ。ら。う。い。よ
 也。你。へ。一。旦。れ。義。勢。を。振。て。後。束。の。名。歎。も。死。と。り。も。矢。を。會
 ま。ん。你。が。あ。ら。い。ざ。ら。ま。ら。ん。幾。百。の。人。命。を。そ。殺。し。交。と。其。の
 一。也。其。派。皆。你。小。政。と。老。吏。日。日。世。の。安。寧。を。廢。家。を。より。足

まは匹またりてを免まざる。拳刃三尺神あり。隔壁一層人耳
多し。再びけ志をてつてかろし。今控老を無二の力とらひてこ
らども應せざるがごとく。世の人も又志ろん物とて叱つてこよ
融寺の南門を移按て。佐右防も移らくなれど。ひねりしけ
たれ入るとは道しと移たれ。被防も我を無及人の中ふふ
ざしと。え来經慮れ義登より入るをお控よとて。免
の尾と右波をこのる。人遠き前とて調をも掛どせり。く切つけ
ころ。入るぬ死のきと按あま。よせろ團つ三三度せしが。入る
鳥足を迷くともびて。ててうん切つけ切例し。傷まかりか。ひ
世れぬふ害のぞく。自ら你が恩を恨め申し。刀れ血押搦ふ。あ
向ふなる神祠の敷げよ。一人の農夫鉄を杖よはきと。喉を
が走り来りて。笠をかき。中津川は新糸の下なり。底

の單身りて出まふをこそせぬ。ゆりせす。るがくれは。伊佐せり
といふ其体め。あつたごとく。入る怒て。いれざり。おのまご。猿知
煮けて。わは。後続を世よ。のう。さん。刀次よ。小熟る。ぞと。これと
川よ。する。事。急なる。て。及んで。此男。制止。の。我。倍。倍。は。あ。は。は
鹿。急。一。ま。つ。た。つ。入。る。は。き。と。ま。り。て。る。は。か。き。す。こ。し。し。し
油。乃。せ。ん。其。四。け。男。懐。中。の。囊。より。安堵。の。所。書。と。出。て。ふ
あつて。え。と。る。所。書。付。録。と。た。く。何。の。郡。を。免。給。る。と。某。の。免
所。部。新。た。傳。の。懸。る。免。上。と。取。り。南。方。表。へ。た。ま。と。も。者。留。居
多し。中津川入る。今。京都。の。干。城。を。守。り。其。本。心。い。ま。と。こ
知。る。人。は。な。ら。ず。某。身。つ。て。貴。侯。の。家。に。竊。候。と。る。す。今
事。急。な。る。ゆ。え。又。姓名。を。披。露。と。と。ち。赤。松。刀。と。ぬ。め。と。放
て。矢。田。十。郎。小。説。と。り。利。害。の。報。を。諒。と。ば。免。所。部。も。甚。と

と云公論と稱す。是下の奉公如いかなれば貴宅より是をさとし
居り得ぬ。れをさしめしむるなり。け事候候と同様に
中津川より入りぬ。入居久回が志成懐と。任去防家より下の者
命して。其地の場田より埋り土を築き石成橋をなす時の人
是を山伏塚とよびしむるなり。其後靈陀の川よりけ塚より
出流する成らる人多し。又靈火の川にて色に虫持と候し
と云とも害と云ふん。偶々と云ふる人の必其志候と候
然ると云他人より

古今奇談 般志野山結 第二卷 終

